

## 「意志ある未来」を共に



常務執行役員 谷田豊

### 出来事の認知と意味づけ

人間の感情や行動は、出来事を「認知」し、それにどんな「意味づけ」するかによって、大きく変わると言われている。起きた出来事を変えることはできないが、それが「自分にとって何であるか」を決定する権限は常に自分にあるというのだ。困難な出来事に直面した際、「努力してもどうにもならないし、自分らに責任はない」とネガティブに考えるのか、「従来のやり方が通用しないなら、変えていこう」とポジティブに考えるのかで、未来は当然全く違ったものになる。

今、私たちは歴史的な転換点に立っている。その一つは人口問題だ。関西の生産年齢人口は 2050 年には 2020 年比で約 3 割減少すると予測されている。これは単なる統計上の変化ではなく、社会構造そのものを揺るがす大きな波であり、多くの識者が警鐘を鳴らし、危機感を共有している。しかし、この大波を前に、立ち止まることは許されない。危機感を持つことは重要だが、それ以上に必要なのは、この「出来事」に対するポジティブな「意味づけ」ではないだろうか。

私は、この人口減少という厳しい現実（出来事）を、「イノベーションを起こすビッグチャンス」として捉えたいと考えている。労働力や資源が制約されるからこそ、非効率を許容する余地がなくなり、技術革新や業務変革が必然となる。この制約こそが、私たちの、そして日本の未来を形作るエネルギー源となり得ると信じたい。

### 私たちの挑戦：持続的イノベーションと破壊的イノベーション

私たち阪神高速は、関西の経済・社会活動を支える大動脈としての使命を担っている。担い手不足、物価高騰など社会構造の変革期のなかでも、この使命を果たし続けるためには、二つの異なるイノベーションを同時に追求する必要があると考える。一つ目は、既存の資産や技術を活かしながら、効率性や安全性を高めしていく「持続的イノベーション」だ。例えば、デジタル技術の最大限活用、AI やセンサーを活用したインフラの予防保全の高度化、ドローンやロボティクス技術による点検・補修作業の省人化、設計・施工・維持管理データの統合・効率化など、労働力不足や熟練技術者の減少に対応するため、既存の維持管理・更新のあり方を一から見直していくチャンスでもある。二つ目は、従来の常識や仕組みを根本から見直す「破壊的イノベーション」だ。特に、モビリティ分野では、高速道路の「概念」そのものを再定義する発想が求められるのではないかと考える。具体には、自動運転技術の全面的な社会実装に向け、通信環境、路車協調システムといった道路側の準備、MaaS エコシステムの中核として交通全体の最適化に資するデータの活用など、未来の可能性は無限に広がっている。

## 意志ある未来へ、ただ一歩なれ

変化に飲み込まれるのではなく、出来事を正しく捉え、このビッグチャンスに皆で掴み取っていきたい。そのために、まずは社内外での連携をより一層深めること、そして私たち自身が前向きな意識を持って、この変革期を楽しむことから始めよう。困難をチャンスと「意味づけ」し、不安を乗り越えて「行動」へ繋げる。そのポジティブな意志が響き合う先に、私たちが目指すべき未来がある。まさに、「意志ある未来へ、ただ一歩なれ」である。